

「センス・オブ・ワンダー」の時代へ

間藤 侑



カウンセリング・マインド

二十一世紀を目前にしての幼児教育界は、必ずしも激しくはないが、大きなうねりに揺り動かされていると言える。平成元年の新教育要領を追い掛けるように、五年度からはカウンセリング・マインドという言葉が重要なキーワードとして登場してきたが、それは、幼児教育の長い歴史の中で経験的に常識化されてきていた保育実践への視点の、大きな転換を求めるものだった。

文部省の保育技術専門講座資料の中でも、カウンセリング・マインドとは、「遊びの高まり」や「行動の広がり」というような、外に現れた部分を評価の中心に据えるのではなく、遊びや行為の内側に秘められた子どもの思いや内的プロセスにもっと注目することであり、この観点から考えると、従来の保育実践ではそうした眼を養い洗練させるような議論やトレーニングが欠如していたと言えると、率直に反省していることが目を惹く。

しかし、もちろん幼児教育が今初めてそれに気付いたわけではない。観察できるものを通して子どもの内面を理解しようとする努力は、少なくとも小学校以上の学校教育より遙かに多くなされてきたことは間違いないだろう。カウンセリング・マインドという言葉は知らなくても、本当の意味で「一人ひとり」に寄り添う保育者の姿勢こそ、幼児教育の独自性を支える大きな特徴だったのだから。これからは、そのことをより強く意識し、幼児教育界全体が自信をもって自分たちの仕事を情報発信することが、危機に陥っている教育全体を立て直す力になれるはずだと思う。

二十一世紀を視野に入れて

しかしそのためには、もっと大きな視野をもつ必要があるだろう。教育という営みは常に時代と深く関わる。かつての不幸な大戦のように時代に翻弄されることもあれば、新しい時代を導く道標にもなることは、歴史が証明する。では今はどうなのか。

巨大な対立は消えた代わりに、世界はまた別の意味で危機に直面している。ミヒャエル

・エンデが描いた『はてしない物語』の、「虚無」の不気味な拡がりのように、人が不条理に死に追いやられ、自然は理不尽に汚染され破壊されていく。そのいずれもが、感性や想像力の貧困や欠如につながっていることを否定できない。かつて人類の祖先たちが実に豊かにもっていたという多くの証拠を、私たちは知っているというのに。

そんな時代に生きて、「二十一世紀にむけて」という言葉を、ただスローガンとして唱えているわけにはいかない。本当にその近い未来につながっていく教育の戦略を、真剣に考えねばならないだろう。

「センス・オブ・ワンダー」

三月末、私は石垣島の浜辺で、生きてもう二度と見ることはない「百武彗星」を見つめながら、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（佑学社）の一節をふと思いついて出した。

「子どもと一緒に自然を探検するということは、周りにあるすべてのものに対するあなたの自身の感受性にみがきをかけるということです。（中略）わたしたちの多くは、周りの世界のほとんどを視覚を通して認識しています。しかし、目にはしていながら本当には見ていないことも多いのです。見すごしていた美しさに目をひらくひとつの方法は、自分自身に問いかけてみることです。『もしこれが、いままでに一度も見たことがなかったものだとしたら？ もし、これを二度とふたたび見ることができないとしたら？』と」。

考えてみると、すでに三十年以上も前に『沈黙の春』で地球環境の汚染を鋭く告発したカーソンのこの『センス・オブ・ワンダー』の中から、幼児教育の未来への何と多くのすぐれたメッセージを読み取ることができることだろう。

保育者の役割の重要な一つをはっきりと意味付け、保育者を勇気づけるこんな一節もある。

「生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』神秘さや不思議さに目を見はる感性』をいつも新鮮に保ち続けるためには、わたしたちが住んでいる世界のよるこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人、そばにいます必要がある」。

次のメッセージも、迷っている大人たちの目を覚まし、高く遠い視野に導いてくれるだろう。

「子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとって、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています」。

いずれにしても「センス・オブ・ワンダー」。この言葉の響きの新鮮さ、爽やかさも、未来を予感させる。私たちもリフレッシュしなければ。

(新潟青陵女子短期大学)